

民主主義理論の危機

ポストコロナを見据えた社会理論の課題

盛山和夫

2022.3.15

学術フォーラム

民主主義の危機と民主主義理論の危機

民主主義の危機の諸相

トランプ現象

Post Truth、Fake News

ポピュリズム、独裁国家の増加

旧ソ連邦諸国家、東欧諸国（民主化の期待の崩壊）

分断、文化戦争

（国内問題そのものではないが）ウクライナ侵攻

しかし、これらはむしろ民主主義理論の危機ではないか？

ソ連が崩壊した頃（30年前）、アメリカ社会がこのように分断を強めたり、社会主義の呪縛から解放された東欧や元ソ連邦の諸国の多くが独裁国家になっていったことを、いったい誰が予見していたか？

これまでの民主主義理論の失敗（1）

- ダールの多元主義
 - 多様化、多元化は進んだ。しかし、分断が深まった。
 - 本当は、多元化の進行は、必ずしも望ましい帰結をもたらすとは限らない。
- ハーバマスなど 市民社会論
 - 自由で平等で自立した諸個人が理性によって作り出す秩序、というイメージ
 - しかし、いかにして可能かの理論はない
 - 共同性が、自動的に成立しうるかのような暗黙の仮定
- ロールズ（後期の『政治的リベラリズム』）
 - 異なる「教義」のあいだの重なり合う合意。
 - しかし、現実には「合意」がなく対立する諸教義

これまでの民主主義理論の失敗（２）

- 現代リベラリズム ドゥオーキンなど
 - 多元的社会。人びとはそれぞれの異なる善の構想を生きており、それは最大限尊重されるべき。
 - 正義。政府が、人びとの善の構想に対して中立的であること。平等な配慮と尊重を受ける権利。
 - しかし、かりにこの意味での正義が実現したとして、それは共同の政治的秩序の成立を意味するか？ 各人が孤立して生きればいいのか。
- 熟議民主主義
 - 集合的な意思決定を正当化する『理由』（reason）を重視
 - 自由で平等な諸個人のあいだでの合理的で公正に営まれた集合的な熟議のプロセス（Benhabib 1996:69)
 - しかし、現実社会のどういう過程が熟議を構成するかは誰にも分からない。実際上は、架空の観念。

これまでの民主主義理論の失敗（3）

- 闘技agonistic民主主義
 - 政治における対立状況を是認ないし賞揚。
 - ある種の、**市場的競争のアナロジー**
 - しかし、経済的市場が必ずしも望ましい帰結を生まないように、政治の競争的市場も望ましい帰結を生むとは限らない。
- 闘争に帰着させる
 - バトラーなどのフェミニズム
 - 「**個人的なものは政治的**である」（MacKinnon 1989: 190）
 - 「政治」とは、意味秩序と意味秩序との闘い、あるいはある意味秩序による支配だという見方。
 - これ自体は間違っていないが、「いかにして望ましい意味秩序を構築するか」に関する理論化は回避。実質的には、単に、闘いを促すのみ。

文化戦争という問題

- アメリカの分断：文化戦争 Gitlin 1996 参照
 - 年 シャーロットビル事件
 - 単に、旧南軍シンパとそれへの反発ではない
 - 歴史認識の問題：アメリカ史における奴隷制や差別の事実をどう捉えるか
 - 各人および政治共同体のアイデンティティに関わる：アメリカは自由と平等で近代世界を牽引してきた国家か、それとも奴隷制と人種差別の罪を負った国家か。
 - キャンセル・カルチャー：コロンブスやワシントンらの否定
- コロナにおける文化戦争
 - コロナは陰謀、コロナはただの風邪、マスクに効果なし、反ワクチン、等々
 - 多数派ではないけれども、深刻な分断を生んでいる。

文化戦争とは――世界知識の問題

- 世界観、社会観、（ロールズの言葉では、教義）の対立
 - Weberの「**神々の闘争**」（アメリカの文献では、参照されることがないが）
 - **イデオロギー対立**、という言葉もあった。かつては、資本主義か共産主義か
 - **究極的な価値や意味の源泉**をめぐる、あるいはそれに根ざす対立。
- そもそも、社会的世界は意味世界。
 - 人びとはそれぞれの意味世界に従って世界を意味づけ、解釈し、生きている。価値、信念、社会についての了解。科学的知識など。
 - 各人の意味世界を「**世界知識** world knowledge」と呼ぶことにしよう。（パーソンズなどでは「信仰体系」。この言葉は、宗教的すぎる）
 - 世界知識は各人にとって根底的、**アイデンティティ**に関わる。
 - 内閣や政党への支持や個別政策や法案への見解のような、部分的なもの、短期的に変化するもの、ではない。
 - 政治過程にとって、人びとがどのような世界知識を抱いているかは、基底的な要因。

世界知識と文化戦争

• たんなる利害対立ではない文化戦争

- 価値や文化のあいだの対立は、足して2で割るような妥協はない
- 「分断」は、しばしば**経済的格差**の文脈で語られるが、本当は、分断現象にとって重要なのはそうした格差を「説明するどのような**理論知識**」が信じられているかの問題。たとえばマルクス主義
- あるいは、アメリカでは、医療保険制度などの社会保障の強化は自由と独立自尊の精神に反し、憲法違反に近い、と信じている人びとが少なくない。これは、一種の**信仰で、容易には変わらない**
- そうした「自由への信仰、あるいは**社会理論**」は、コロナ禍のマスク着用やワクチン接種において「選択の自由」を主張することへの**正当化の基盤**となり、対立を深める。
- **闘技**民主主義は、政治的意見のあいだでの闘技を通じて、よりよい集合的決定がえられると（まったく、根拠もなく）考えているが、こうした信仰のあいだの対立状況では、市場メカニズムからの類推である闘技の概念が有効だとは考えられない。

文化戦争の諸相

- 地球温暖化をめぐる対立
 - 少数派だが、「温暖化は起こっていない」とか「温暖化の原因は2ではない」とか「産業の規制等では温暖化は防げない」とか「温暖化はむしろプラス」とか
- グローバリゼーションをめぐる対立：国際会議への抗議運動
 - 格差の実態よりも、イデオロギーが先行
- 移民をめぐる対立
 - 人びとの国際移動は自由であるべきだという考えと、国家主権の観点から移動制限は当然という考え。
- 日本でも
 - アジアを侵略し、許しがたい罪悪を犯した国家としての日本、という見方と、他の非西欧諸国に先駆けて近代化を達成しえた日本、という見方。
- あるいは、韓国
 - 民族の尊厳を踏みにじった日本に協力した親日派は許しがたい、という考えと、日本との協力がある程度やむをえないとする考え。

文化戦争の深刻さ

- しばしば、対立する相手を「**不倶戴天**の敵 mortal enemy」とみなす
 - **相手が消滅**することが、最も望ましい。**正義**。
 - かつて、冷戦時にその雰囲気があった。
 - その場合、消滅させることが正義。手段は選ばない。
 - ジェノサイド
 - ある人びとの境遇が恵まれないのは、**搾取**する者がいるからで、境遇の改善のために、その排除を。というような理論。
- そこまで極端でなくとも
 - 相手との**コミュニケーションの拒否**。（コミュニケーションや対話や議論に意義を見いださない）
 - コロナ禍における文化戦争には、これに似た状況
 - **目的は手段を正当化する**。相手の不正さや虚偽を暴くことにとどまらず、多少不正な手段を用いてでも相手を破滅に導くことは、正義であり、他のルールに優先する。

文化戦争の背景

- アメリカの場合
 - 最高裁の決定が政治に優先
 - 現代リベラリズム。「正義」の優先。運動。
 - その一方で、キリスト教原理主義など。
- より一般的に
 - グローバリゼーションとそれへの反発
 - メディア状況の変化
 - 多様化がエコーチェンバーは生んでも、異質な他者とのコミュニケーションには貢献していない

文化戦争と文系学問

- Weberの神々の闘争は「職業としての学問」に。
 - 文系学問における信仰とイデオロギーの対立
- 60-70年代学生叛乱のあとの文系学問自体における文化大革命
 - アメリカの価値・アイデンティティへの懐疑、近代への懐疑、人文系学問の在り方への懐疑（自文化中心主義など）
 - ファイアーベントなど、反科学ないし相対主義。
 - 脱構築、現代（当時の）フランス思想に潜むラディカルな相対主義。サイエンス・ウォーズ。
 - 文系左派における反グローバリズム。ハーベイなど。

文化戦争と文系学問（2）

- アメリカのキャンパスにおける熾烈な文化戦争
 - PC （スタンフォード大学の「西洋文化」の授業）
 - キャンパスにおける言葉狩り、ピンカー事件、批判的人種理論、キャンセル・カルチャー
- 歴史学など集合的記憶への注目の両義性
 - ホロコースト、歴史認識。「歴史的事実を明らかにする」のは、むしろ学問として当然。
 - しかし、結果として、悲惨体験や民族意識の強化など、単に過去の対立を呼び覚ますことに終わらないか？
AC問題に似た構図。
- 以上から明らかなのは、文系学問は、文化戦争を焚きつけたとまでは言えなくても、少なくともその当事者でもあるということ。

これまでの民主主義理論の失敗の理由

- 多様化への**素朴な楽観視**
 - ダールやロールズに見られる
- 普遍性や普遍主義への**素朴な楽観視**
 - 現代リベラリズムにおける「正義」への信仰
- 熟議や闘技が実効的な政治をもたらすための「条件」への**無配慮**
 - ともに観念論。実証性への配慮が全くない。
- 「**合意**」プロセスの軽視ないし無視。
 - 政治とは、一定の合意をうるプロセス。むしろ、強制的な合意もあり、合意さえあればいいというものではない。
 - しかし、一定の合意がなければ集合的決定は成立しえない。
 - 政治的決定、そのプロセス、そのしくみなどについての、人びとのあいだでの基本的な**是認**。

既存の民主主義理論が、世界知識の 多元性を軽視してきた理由

- 年代までは、社会理論全体が「素朴経験主義」、行動科学的
 - 刺激－反応。文化的一元論 皮相な合理性仮定、
 - ダウنزの経済的政治理論
 - 素朴「歴史発展論」――人びとは、一元的な合理性に向かって収束する
 - 世界知識のような要因はほとんど無視される
- 文化革命のあと
 - 「市民社会」の理念。東欧革命でより強化。共同性への素朴な信頼
 - 他方で、人びとの固有の「善き生」を重視するリベラリズム系諸理論――共同性の問題を無視。共同性を構築しようとするときに生じる軋轢の深刻さを無視。

合意（共通了解）の問題

- **政治理論の課題**は、単に「どういう集合的決定が帰結するか、すべきか」だけではなく、「**いかにして集合的決定をうるか**」「**そのプロセスにどのような合意が関わるか**」などの探究も。
 - ここには、独裁、寡頭制、王制、共和制、民主制などの古典的な議論も。
 - ポイントは、広義の民主制の中にもさまざまに異なる**集合的決定のタイプやプロセス**
 - たとえば、議院内閣制と大統領制、選挙制度
 - 司法権力が政治的決定に及ぼす影響や権能
 - メディアの機能、世論と政治との関係性
 - 人びとの意見（世界知識）の分布
 - そもそも「合意」の性質
 - 基本的に、統治・権力の正当性問題

たとえば法創造の権限の問題

- ウォルドロン（1999）：アメリカでは連邦最高裁判所に憲法解釈の巨大な解釈権が付与され、それによって実質的に新たな法規範が生み出されているが、これは問題だと指摘。
 - これには、「立法の不作為を乗り越えて憲法の理念を現実化する望ましい政治のありかただ」として讃える議論が圧倒的に多いが、・・・
- Walzer[2007:9-10]：「最高裁の 人の判事」たちがレーニンの前衛党にも似た「哲学的教義」を背景にした突出した権力を保持していて、デモクラシーとの緊張関係があると指摘している。
- こうした意見は、政治理論で必ずしも主要論点になっていない
- また、二院制をとる議会制度における「非決定の構図」
 - ねじれ国会のもとで、予算関連法案や国会承認人事
 - アメリカはもっと深刻で、予算そのものの非決定や国家財政のデフォルト懸念
- 中央銀行と政府との関係

脱政治を志向する政治理論

- 決定のプロセスの軽視は、「政治」への忌避
- コリン・ヘイ『なぜわれわれは政治を嫌うのか』
 - 「『政治』という言葉は、近年では多くの人々にとって欺瞞、汚職、教条主義、非効率、私的な事柄への不当な介入、意思決定での透明性の欠如などを意味するようになった。・・・『政治的』・・・は嘲笑と忌避の対象となる」(Hay 2007=2012:6)。
- 市民社会論における「政治の不在」の理想
 - (自律した市民社会という) 「理論構成から生みだされてきたものが、社会についての非政治的なモデルである。ここでは、社会は、相互に作用し合う諸力の自己完結的体系であって、その「外側」にある政治機関の助けをかりることなく、みずからの存在をもちこたえることができるものと思われている。」(Wolin 2004=2007: 338下)

文化戦争と合意の問題

- ここで問題なのは、文化戦争は**合意が困難**な事態だということ
 - 単なる利害の対立ではなく、世界知識の対立
 - 経済理論やゲーム理論における「望ましい帰結」は、パレート効率性的な概念。ともに。しかし、文化戦争では、完全にゼロサム。
 - 政治理論の重要課題は、人びとの世界知識における差異や対立が存在しているときに、いかにして持続可能な民主主義的な政治が可能か、という問いに答えること。
- むろん、アプリアリに合意や共生が望ましいわけではない。
 - 叛乱、暴動、内戦、独立などが「正しい」こともありうる。
 - 「**共生することの価値**」を見いだしうるか。どういうときに、見いだすことが「正しい」ことか。
 - ここでは、分断を回避することの価値をどう理論化するかという課題。それが、**民主主義理論の課題**。

ミニマムな合意（共通了解）の必要性

- 安定した政治共同体の成立には、一定の合意が不可欠
 - 政治的決定の基本的なしくみについて
 - 統治機構の構造、選挙制度、など
 - それらを規定した憲法等の法とルール
 - 価値、諸価値のあいだの優先順位
 - 共同体としての一定のアイデンティティ
 - 世界知識は異なっても、「共生しうる」という点で合意できるか？ そうした合意にはいかにして可能か
 - ロールズは、「重なり合う合意」と表現
 - いわば闘技のルール。政治理論は、この課題に取り組む必要。
- ときには、通常の意味での政治共同体を構成することが不可能な対立もある。その場合には、別々の国家を構成すればいい。さまざまな独立運動。ただし、地理的に分離できることが条件。

コミュニケーションを通じての共同性の探求

- 政治システムに対する一定の共通了解（合意）は、コミュニケーションを媒介とする。
- 何が共通に価値あることか、何が共通に従うべきルールか、など。たとえば、もとの世界知識においてはさまざまな対立や相異があるとしても、議論やコミュニケーションを通じて、「お互いに奉じうる共通の価値やルール」を見いだす可能性
- それは、世界知識の変容を意味する。
- 今日の分断においては、コミュニケーションそのものの遮断が起こっている。
- 政治システムを支える「メタ的な社会システム」の重要性
- いかなるメタ的な社会システムが、一定の望ましい政治システムをささえるか？
- 人文系学問には、そうした探求課題が。

主な参考文献

- Dahl, Robert A. 1989 *Democracy and Its Critics*. Yale University Press.
- Gitlin, Todd 1996 *The Twilight of Common Dreams: Why America Is Wracked by Culture Wars*. H. Holt & Co. (疋田三良・向井俊二訳 2001 『アメリカの文化戦争——たそがれゆく共通の夢』 彩流社)
- Hay, Colin, 2007, *Why We Hate Politics*, Polity Press. (吉田 徹訳, 2012, 『政治はなぜ嫌われるのか——民主主義の取り戻し方』 岩波書店.)
- Sacks, D. O. and P.A. Theil 1998 *The Diversity Myth: Multiculturalism and Political Intolerance on Campus*. The Independent Institute.
- 盛山和夫 2006 『リベラリズムとは何か——ロールズと正義の論理』 勁草書房
- 盛山和夫 2014 「政治理論の応答性とその危機——脱政治への志向がもたらしたものの」、Pp. 281-309, 井上彰・田村哲樹編 『政治理論とは何か』 風行社.
- Waldron, Jeremy, 1999, *The Dignity of Legislation*, Cambridge University Press.(長谷部恭男ほか訳, 2003, 『立法の復権：議会主義の政治哲学』 岩波書店.)
- Walzer, Michael, 2007, *Thinking Politically: Essays in Political Theory*, Yale University Press.
- Wolin, Sheldon S., 2004, *Politics and Vision, Expanded Edition*, Princeton University Press. (尾形典雄・福田歆一ほか訳, 2007, 『政治とヴィジョン』 福村出版.)